



信州大学 経済学部同窓会報

第 8 号

信州大学創立60周年

平成21年 7月31日発行

発行者 信州大学経済学部同窓会
同窓会事務局 〒390-8621
長野県松本市旭3-1-1
信州大学経済学部内
TEL・FAX 0263-37-2309

E-mail : k-doso@shinshu-u.ac.jp
URL : http://www.econ.shinshu-u.ac.jp/index.html

第八号の紙面より

- 会長あいさつ 矢口晋司
- 信州大学創立60周年記念行事 大槻正義 粟澤 徹
- 同窓会理事会報告
- 同窓会総会報告

- 連載 ゼミ「今」
—後輩達のゼミ紹介—
舟岡ゼミ
沼尾ゼミ
- 会員のたより
手塚 伸 (1978年入学)
轟 寛逸 (1978年入学)
福島和利 (1981年入学)
小林千晶 (1990年入学)
水野正人 (1999年入学)

- 文理学部卒業生からのたより
小林 實 (1963年卒業)
清水邦男 (1963年卒業)
- 編集後記



会長あいさつ

同窓会長 矢口 晋司

↑1978年入学

信州大学経済学部同窓会員の皆様におかれましては、各分野で広く活躍のこととお喜び申し上げます。平素より、母校の発展ならびに同窓会活動に対し何かと関心を頂きありがとうございます。

六月六日に開催されました同窓会総会にご参加頂きました同窓会員の皆様方に、この場をお借り致しまして厚く御礼申し上げます。これまでの同窓会総会は、毎年の定期的開催定着化を目的に、銀嶺祭が開催される十一月三日に行つてまいりましたが、年度が半分以上経過した時期に、予算および事業計画の承認を頂く事に対する意見が昨年の総会の席上出された事を受け、理事会にて検討した結果、開催時期を早めることとし、信州大学創立六十周年記念行事にあわせての開催となりました。開催告知が若干遅れてしまった事や前回の総会からまだ半年しか経過していない事など多くの理由から、多くの同窓会員の皆様にご参加頂けなかつた事は残念ではございますが、今後も毎年六月上旬土曜日開催を目指し、多くの皆様に参加頂ける環境作りを努めて参りたいと思ひます。開催時期や総会に合わせ企画すべき行事内容等につきましても、同窓会員皆様の忌憚無きご意見をお寄せ頂きたいと思ひます。それらの意見を参考に理事会にて検討を重ね、多くの皆様に参加頂ける同窓会総会を開催して行きたいと考えておりますのでよろしくお願ひいたします。

さて、昨年の総会からの半年を振り返ってみますと、信州大学創

立六十周年記念行事に対する同窓会としての支援体制の検討と他学部同窓会との連携強化を中心に活動を展開してまいりました。ここでは以下の二点についてご報告させていただきます。まず一つ目は信州大学東京同窓会についてでございます。すでに大学のホームページでも紹介されておりますが、本年二月に、信州大学で初めての学部を超えた支部として設立されました。学部、世代を超えた交流の場が誕生した事で、東京近郊にお住まいの同窓会員の皆様方にも機会を見てご参加頂ければと思います。経済学部同窓会の東京支部設立に向けては、昨年検討委員会を立ち上げさせて頂き、支部設立の必要性、支部組織の在り方についての協議を行なっておりますが、信州大学東京同窓会を通じ、学部を超えた方々のご意見、他学部同窓会、東京支部の動きなどを情報収集し、今後も検討委員会、理事会で検討を深めてまいりますので、会員の皆様方の忌憚無きご意見をお寄せ頂きたいと考えております。

次に二つ目ですが、終身会費納入に関する件であります。十九年十一月の総会において、終身会費一万円徴収を決定頂き、文書にて会員の皆様方に終身会費一万円の納入をご依頼申し上げたところ、趣旨をご理解頂き、五月末現在で七二五名の皆様方よりお振込みを頂きました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。理由が原因で、まだ多くの会員の皆様方に終身会費徴収の趣旨をご理解頂くことができず、お振込み手続を完了して頂けない状況となつ

ております。国立大学独立行政法人化以降、大学を取り巻く情勢は非常に厳しいものとなっており、経済学部も削減された研究費の中で成果を期待されるという極めて厳しい環境となっております。同窓会としても学部における研究教育支援を資金面も含め検討していく必要性を強く感じているもの、同窓会も大変厳しい財政状況にあり、具体的な支援検討も進められない状況となっております。同窓会員全員の皆様方の深いご理解を頂く中でこの難局を打破していきたいと考えておりますことから、この場をお借りし、終身会費の納入を再度お願い申し上げます。

同窓会員の皆様方の一層のご活躍をご祈念申し上げますと共に、同窓会もより一層の発展、成長に向け邁進する事をお約束し会長あいさつとさせていただきます。



信州大学創立六十周年記念行事

六十周年記念式典・記念コンサート報告

副会長 大槻 正義

(1980年入学)

一、記念式典

信州大学創立六十周年記念行事が、六月六日(土)に県松本文化会館で開かれ、長野朝日放送アナウンサーで経済学部卒業生の蔵田玲子さんの司会進行により、記念コンサート・記念式典・記念祝賀会が盛大に執り行われた。

記念式典は、信州大学に関わる各界の代表者が多数臨席する中、厳かに挙行された。

小宮山学長の式辞では、信州大学は昭和二十四年に県下の高等教育機関八校を母体として発足し、今年五月三十一日で創立六十周年を迎え、この間、八万人を超える有為の人材を輩出してきたこと、現在は八学部と、三年前に新設された全学教育機構を擁し、大学院では修士課程、六研究科、博士課程三研究科、専門職学位課程一研究科を設置し、『地域に根ざし、世界に拓く』総合大学として、教育研究などの充実発展に努力していることが述べられ、さらに国立大学法人化により、これまで以上に個性化、高度化、国際化が求められており、総合大学の優れた多彩な人的・知的・物的資源と、信州という恵まれた立地条

件を生かし、個性豊かな学部が協働し、オンリーワンの魅力あふれる地域拠点大学を目指し励んでゆくと、六十年の歴史の重さと決意が語られた。

また、来賓の村井知事からは、地方分権の時代を迎え、人材育成を通じて、地域発展に多く寄与してほしいとご祝辞をいただき、多数の祝辞・祝電が寄せられた。

最後に、信州大学の歴史を辿る映像が流れ過去を振り返り、今後を展望することができた。

二、記念コンサート

記念式典前には、信大交響楽団や、附属松本小中学校のコーラス・信大教授でソプラノ歌手の池田京子さんによる記念コンサートも開かれた。

信大交響楽団の演奏はもとより、附属松本小中学校のコーラ



スは聴き応えがあった。特に小学生は日頃の指導と、熱心な練習に裏付けられた伸びやかな歌声で聴衆を魅了していた。

コンサートプログラム

信州大学交響楽団

「カルメン組曲」より

闘牛士

(第一幕への前奏曲より)

前奏曲

アラゴネーズ

(第四幕への間奏曲)

ハバナ

セギデイヤ

アルカールの竜騎兵

(第二幕への間奏曲)

闘牛士の歌

ジプシーの踊り

信州大学教育学部附属

松本小学校合唱部

COSMOS

ここからいっしょとおいところ

せかいのふしぎ

信州大学教育学部附属

松本中学校3学年

生きる

オラトリオ「天地創造より

「天は神の栄光を語り」

ソプラノ 池田 京子

歌の翼に

早春賦

日本の歌メドレー

あざみの歌

六十周年記念行事に参加して

副会長 栗澤 徹

(1981年入学)

ゴンドラの唄
オペラ「スカホリ
歌に生き、愛に生き」
オペレッタ「チャールズ・シュンの女王より
「山こそ我がふるさと」

六月六日土曜日に長野県松本文化会館において、信州大学創立六十周年記念行事が盛大に挙行され、私も出席して参りました。行事は三部構成で、大ホールにて記念コンサートが開催され、続いて記念式典を行い、場所を中ホールに移しての記念祝賀会というものでした。

記念コンサートは大ホールが大勢の観衆で埋まり、大盛況でした。信州大学交響楽団による演奏には、我が信州大学にこんな素晴らしい学生オーケストラ団体があったのか、と驚かされました。信州大学教育学部附属松本小学校合唱部および信州大学教育学部附属松本中学校3学年の皆さんの微笑ましく、一生懸命な姿がコンサートを盛り上げ、教育学部教授の池田京子先生の情感あふれる歌声に聴衆は魅了されました。

記念式典は長野県知事の村井仁氏をはじめ、多くの来賓を招いて行われ、式典の最後には信州大学の現況を伝える映像が上映されました。記念祝賀会は松本文化会館内の中ホールにて行われましたが、想像していた以上に盛大なもの



でした。出席者の数は詳しくはわかりませんが、四〇〇人近くいたのではないかと思います。中でも印象深かったのは、祝賀会を盛り上げてくれた学生サークルの活躍です。「信州大学ジャズ研究会」は祝賀会の最初から最後までBGMを奏で、洒落た雰囲気を作り出してくれましたし、「信州大学フラメンコ部」並びにYOSAKOI祭りサークル「和つしよい」はステージをはち切れんばかりの若さで埋め尽くしてくれました。母校の先生方や先輩方、後輩の皆さんとお会いできることは同窓会に参加させていただく中で最大の楽しみですが、現役の元気な学生達と出会えることはそうそうありません。彼らの姿に自分の学生時代を重ね、あの頃に帰ったような懐かしさ、楽しいひと時を過ごさせてもらいました。

今回の六十周年記念行事に先



立ち、午前中に経済学部同窓会の理事会、及び総会が開催されました。今回もそれほど多くの方々に参加いただけただけではなく、席者の顔がよくわかり、先生方を含めてこれまでにも増して近い存在になれたように思います。学年やゼミを超えて、「信州大学経済学部」という名のもとに集う者同士のお付き合いは、日常の生活では得られない多くの刺激があり、本当に貴重なひと時です。総会に出席された方が何人も六十周年の記念祝賀会に参加されていたため、一緒に酒を酌み交わす機会に恵まれ、話しも尽きることがありませんでした。

今回は今回の記念行事に参加させていただき、以前にも増して経済学部に愛着が湧き、誇らしい気持ちを持つことができたように思います。昨年の経済学部三十周年のパーティーに続き、今回もコンサート・式典・祝賀会、すべての司会を務められた長野朝日放送アナウンサーの蔵田玲子さんや、来賓として出席された代議士の下条みつさんら経済学部同窓生の活躍には、同じ信大生の中でもやはり親近感を覚えます。また、祝賀会を盛り上げた「和つしよい」に所属する学生さんにビールを注いだ際、三人の経済学部生と話しをしたのですが、「就職大丈夫？」と問いかけると、三人とも「もう決まりました！」と顔をほころばせて答えてくれました。有名私立大学に通っている知人のお子さんは、就職が決まらず就職浪人するよりは留年して来年の就職活動にかけると、後輩たちの頑張りを聞いていたので、このように嬉しく思いました。学部長の渡邊先生がよく言われる「大学から社会へ、社会から大学へ」という経済学部のテーマが卒業生の活躍によって具現

化され、社会での評価の高まりに繋がっているのではないかと思います。母校というのは本当に良いものです。信州大学の、中でも経済学部の卒業生という、ただそれだけの共通点でしかないのに、同窓生の活躍を目にし、耳にすると、刺激を受け、勇気づけられ、そして自分のことのように誇らしく思えてきます。自身にとっても財産である母校のために少しでもお役にたてるよう、微力ではありますが同窓会活動を通してこれからも尽力して参りたいと思っています。同窓会活動に興味はあるものの、どうも足が向かないという方が大勢いらっしゃると思います。ぜひ一度、総会等に出席してみてください。信州大学のキャンパスは、きつと忘れかけていた何かを思い出させ、新たなエネルギーを与えてくれることでしょう。

経済学部同窓会理事会報告

日時：平成21年6月6日(土)

午前10時より

場所：信州大学経済学部
新棟6階 第1会議室

- 1 開会(樋口教授)
- 2 同窓会長挨拶(矢口会長)
- 3 報告事項
- (1) 20年度同窓会活動報告について

- ・ 前回理事会以降の活動内容について矢口会長より報告
- ・ 信州大学同窓会連合会活動報告について
- ・ 前回理事会以降の活動内容について矢口会長より報告
- ・ 文理学部・人文学部・経済学部・理学部同窓会役員連絡会報告について
- ・ 平成21年1月31日に開催さ

平成20年度会計報告

【収入の部】		
前年度繰越金	16,740,949	
入会金及び終身会費(予約金含)	6,870,000	(10,000×305・20,000×191)
利息収入他	126,357	(定期預金満期・寄付金)
合 計	23,737,306	
【支出の部】		
理事会関係経費	207,440	(交通費・総会懇親会補助)
経済学部活動支援	1,000,315	(毎年100万円・総会承認済)
その他学部補助	1,160,525	(学部創立30周年記念行事補助)
卒業表彰	90,000	(成績優秀者3名旅行券)
同窓会連合会費	70,315	(拠出金)
印刷製本費	537,750	(6号・7号会報、名簿調査カード)
通信運搬費	1,228,245	(会報2回発送、調査カード着払い、送金手数料)
事務用品費	134,878	(封筒、宛名ラベル、メモリースティック)
人件費	911,600	(パート給与・会報発送作業アルバイト)
雑費	35,026	(会費超過払込返金・蛍光灯・灯油代)
合 計	5,376,094	
23,737,306 (収入合計)	-5,376,094 (支出合計)	=18,361,212
【次年度繰越金】 ¥18,361,212 (内訳は備考を参照)		
備考		
払込口座残高(旧)	282,775	
払込口座残高(新)	11,329,420	
預貯金：郵便貯金(定額)	6,500,000	
郵便貯金(普通)	231,887	
現金	17,130	
合 計	18,361,212	

平成20年度会計監査の結果、適正であると認めます。

平成21年6月6日

監事 伊 東 一 雄 印

監事 川 田 智 弘 印

- 4 協議事項
 - (1) 終身会費の徴収状況について
 - (2) 5月末現在、725名である事を確認。
 - (3) 今後も会員への依頼を重ね、徴収率を上げる事を確認。
 - (4) 同窓会総会について
 - (5) 協議内容ならびに役割分担について確認。
 - (6) その他

・ 同窓会の名称、会員の声を聞き出す仕組み作り、卒業生

- 5 議長退任
 - (1) 閉会(矢口会長)
 - (2) 午前10時50分に閉会となる。(会長)
- ・ 名簿について意見交換を実施。今後、検討を重ねることを確認。



経済学部同窓会総会報告

日時…平成21年6月6日(土)
午前11時より
場所…信州大学経済学部
新棟6階 第1会議室

進行…高木理事

1 開会(大槻副会長)

2 名誉会長挨拶(渡邊経済学部長)

3 同窓会長挨拶(矢口会長) 議長選出 3K轟寛逸さんを選出

4 書記ならびに議事録署名人の任命

5 書記に90K澤柳信也さん、議事録署名人に3L松森幸一さん、9K田丸徹郎さんを任命

6 議事

(1)事業報告および会計報告の承認について

・矢口会長より原案を説明。
・同窓会終身会費の納入状況(5月末現在、725名)について説明がなされた。

・伊東監事より会計監査報告
・質疑応答は特に無く、全員
の拍手により原案承認される。

(2)予算および事業計画について

・矢口会長より原案を説明。
【主な計画】 経済学部活動
支援、学生表彰、同窓会報
送付2回、等

・本年6月5日、信州大学創立60周年記念に際し、上映

会を開催した「中山晋平物語」へ共催金として5万円を計上した事を報告。
・質疑応答の後、特別の意義はなく、全員の拍手によって原案が承認された。

(3)その他

・矢口会長より、同窓会報7号に投稿された関谷幹事からの提案について同窓会の意見を説明。(提案①会員意見の集約インフラ整備

②同窓会の名称制定③名簿作成)
・出席者より、予算のあるうちのインフラ整備、同窓会としての今年度活動の目玉設定、総会に来やすい状況作り、現役学生との接する機会が創出などを求める意見が出された事を受け、同窓会理事会ならびに経済学部で検討を重ねることを確認。

◎議長退任
7 閉会(粟澤副会長)

◎午前11時50分に閉会となる。(会長)



連載

ゼミ「今」

—後輩達のゼミ紹介—

舟岡ゼミ

堀田 朝美

舟岡ゼミは新年度の四月から十五名の新ゼミ生を迎え、総勢三十三名で活動しています。

舟岡先生の方針の下、ゼミ生を五く六名ごと六つの班に分け「サブゼミ」と称して、ゼミの時間以外でのグループワークをしています。そして週一回のゼミで、だいたい二く三班が研究成果をパワーポイントで発表し、全体で議論をします。

昨年度は、長野県内で製造業を営む日本電熱株式会社様、野村ユニソン株式会社様、ミスズ工業株式会社様の三社の企業研究を行いました。

研究当初はweb上の情報から企業を読み解くばかりでしたが、各社からご協力を賜り、数度に渡って会社を訪問し、実際に工場を見学させていただくことができました。また、数期間の財務諸表を借用して財務分析



にも力を注ぎました。

二班が一社を担当するという形です。すめていたのですが、同じ情報を見聞きしたにもかかわらず、その分析結果・考察は班によって違いが表れます。班同士の意見交換は自然と白熱し、サブゼミに加えて合同サブゼミが夜遅くまで続くこともたびたびでした。

この企業研究で私たちは、机上の学習だけでなく、現場の生きた情報がいかに大切かを実感しました。同時に、的確な情報を自分たちの手で掴み取ることの難しさを痛感しました。

今年度は、マーケティングにおける情報収集の能力を身につけるべく、マーケティング・リサーチの勉強と、経済データの分析を通して外部環境の評価の

2つを行っていきます。

マーケティング・リサーチは、現在、参考書に沿って調査方法を学んでいるところで、併行して自分たちが興味のあるテーマについて、実践に移していくことを予定しています。具体例を挙げると、私たちの身近な事柄に着目して「銀嶺祭で売れる屋台を出店する」として、どのようなタイプにするか?、「生協のおにぎりの廃棄をなくすにはどうすればよいか?」等に対する適切な答えを得るために、調査案を設計し、実際に調査します。

データの分析を通じた経済状況の把握に関しては、昨今の金融危機を背景とした経済の変動を、六つの班がそれぞれの視点から分析しています。サブプライム・ローン問題をはじめとした金融危機の原因を探る班、国内の需要の変動とその要因を解明する班、貿易に焦点を当てた各国間の経済関連を調査する班、自動車産業の現状と行く末を研究する班など、その研究課題は多岐に渡ります。

毎週のゼミに各班は万全の準備をして臨みますが、まだまだ未熟者な私たちの発表には、先生からの厳しいご指導(突っ込み)が飛んできます。扱う内容も多いので、既定の授業時間はあつという間に過ぎ、気づけば学校が閉まる九時十五分前までゼミが続く・・・なんてことが今では当たり前となっています。

そんな勉強熱心な舟岡ゼミですが、ここで、各種イベントも紹介します。年間行事として春と秋のゼミ合宿を中心に、夏は登山、冬はスキー合宿、日々の

懇親会などがあります。今年の春合宿は、六月初頭に山梨県北杜市清里を訪れました。一泊二日という短い期間でしたが、宿泊先の研修センターでのデイベート大会や懇親会、パーベキュー、シャトレレーゼ工場の見学などと内容は盛りだくさんでした。

登山は、一昨年は富士山に登り、昨年は八ヶ岳の赤岳―硫黄岳縦走をしており、今年は二泊三日で槍ヶ岳を散歩します。山好きの先生と山歩きサークル所属のT君が立てたプランに対し、女子からは三日もお風呂に入れないのは嫌だと文句が出つつ、それでも参加してしまうのがみんなのいいところです。

秋の二泊三日の乗鞍合宿での就職ガイダンス、論文指導、パーベキューや馬鹿騒ぎなどは恒例の楽しみで、年末の忘年会に向けて、年内のイベントは目白押しです。

また、一昨年に引き続き、今年も(十月に)舟岡ゼミの卒業生が一〇〇名程集まって、OB会が開催されます。私たち現役生も参加させて頂きますが、社会の大先輩の方々とお会いし、言葉を交わせる貴重な機会を今から心待ちにしています。同時に、卒業生に見せる、私たちの知らない舟岡先生の顔を垣間見ることがするのも楽しみみの一つです。

このように舟岡ゼミ生は多くの人や自然と触れ合いながら日々邁進しています。よき指導者、よき友に恵まれ、みなが切磋琢磨して成長し続けていく、それが舟岡ゼミです。

沼尾ゼミ

「地方自治」のゼミです

沼尾ゼミは、「地方自治」に関する様々な問題を研究するゼミです。ひとことに地方自治といってもその研究範囲は広く、例えば、昨年度は、「田中県政」「浅間温泉の活性化」(浅間温泉は大学近辺にある温泉街です)、「市町村合併」について調査・研究をしました。

「自治の現場」へ

沼尾ゼミの最大の特徴は、実際に学生が必ず「自治の現場」に足を運び、そこで見て聞いたこと、感じとったものを研究に活かすことにあります。例えば、今年度は平成の大合併において自立の道を選んだ自治体へヒアリングを行ったり、前松本市長とのインタビューを行ったりしています。

このようにゼミ室内での研究にとどまらず、大学の外の生きた教材も活用して研究を進めています。

グループ研究が中心

現在、沼尾ゼミは二・三年生あわせて十七人です(このほかにすでに進路を決定した四年生が一人参加しています)。ゼミの運営は基本的に学生に委ねられています。研究内容も学生自身で決めることができます。

まず、ゼミ生一人ひとりが研究テーマを企画し、検討しそれを三々四々のテーマに絞り込んでいきます。そして、そのテーマに関心をもつ者どうしがグ

ループをつくり(各グループは三々六人)、グループごとにひとつのテーマを前期の半年間、追求していきます。後期には、また同じようにして新しいテーマを共同で調査・研究していくことになっています。

グループ研究を進めていくことで、自分の考えをうまく表現することや、会議を進めていくスキルも身につけることができます。

もちろん合宿もあります

夏休みには合宿を行っています。合宿は、前期の研究成果の発表やリフレッシュを中心にした内容となっています。今年の夏は、木曾の御嶽山を間近に望むことができる開田高原で行う予定です。御嶽は海拔三千メートルをこえる山ですから、この高原は夏でも朝晩は寒いくらいだそうです。

新入生歓迎コンパ、花見、ほたる狩りや暑気払いなど随時イベントも開催し、そこでゼミ生同士の親睦を深めています。



会員のたより

大内力先生を偲ぶ

理事 手塚 伸
(1978年入学)

今年の三月末、私は、インターネットから何となく大内先生の著作を検索していた。先生の経済学大系の最終巻となる「日本経済論下巻」が出版されたかもしれないと思ったからだ。残念ながら、まだ出版されていなかったが、偶然、東大UP選書から出されていた「国家独占資本主義」が、こぶし文庫から再版(改訂版)されたことを知り、早速購入し、久しぶりに読み直した。

「こぶし文庫版 序」は、先生らしい風格のある文章であるが、次の一節が妙に気に掛かった。それは、「...ここ十年くらいの間にアメリカを先頭に、その尻馬に乗る日本をはじめ多くの途上国までが、急激に、しかもますます凶暴な形で国家独占資本主義を推し進めているにもかかわらず、その本質ないし歴史的性格の解明がますます沈滞の中に陥りつつある現状に対して黙視したままで世を去っていいのか」という老翁(婆?)心がまだ少しは残っているせいである。」

時計の針を三十年ほど前に戻すと、信大の大内ゼミで先生に質問している私の姿がある。「方法論の中では、原理論、段階論(帝国主義論)を経て、最終的には現状分析に至る経済学の方法論が示されていますが、実体経済の中でどのような政策をとるのか、つまり、戦略論の分析は経済学の分析対象にならないのか。」今考えても幼稚な質問ではあるが、先生は、経済学方法論と戦略論との違いを丁寧に教えてくださった。

改訂版を読みながら、こんなことを思い出すにつけ、日本や世界の現状に、忸怩たる思いがおりなのだろうと思っていたところへ、四月二十一日の夕刻、哲学者の内山節さんから電話があり、その日の朝日新聞夕刊から、先生が四月十八日、午後五時三十二分、九十歳で亡くなられたことを知らされた。

さて、高校三年になってもろくに勉強もせず、遊び呆けている私を見かねてか、普段あまり口をきかない父が私に「おまえ、大学はどうする。まだ決めていないなら、今度、大内力先生が東大から信大へ移られる。だから信州大学へ行け。」という。突然のことなので驚いたが、当時地方都市の高校生でも先生のこととは存じ上げており、珍しく父の言うことを聞き、私は信州大学に入学することとなった。

中国の大学との共同研究の関

係があつて、二年に進級した五月連休明けに、先生は颯爽と登壇された。当時、学会の重鎮であつた先生に「颯爽」という表現は適切ではないかもしれない。これは、暉峻衆三先生が、ご著書の中で、大内先生が東大社会科学研究所助教授に二十九歳の若さで就任されたときのご様子を「颯爽と就任された」と表現されていることを真似たわけではない。ただ、信大に来られたときの先生のエネルギーな姿は、正に「颯爽」という表現が的確であつたように記憶している。

三年に進級する際、当然、大内ゼミを選んだ。ゼミでの先生は非常に厳しかったように思う。ゼミ生の発表が平板だと、先生はよく爪を切られた。毎週のように爪を切るものだから、ゼミ生の中からは、自分たちの不甲斐なさばかりで、先生の爪はよくも伸びるものだ、といった妙な感想が漏れ聞こえた。当たり前のことだが、私たちがいくつ議論を挑んだところで勝ち目はないのだが、どんな稚拙な議論にも先生は丁寧に答えてくれた。私には、すべてが納得できた。

できの悪い私であつても何とか卒業できることとなり、卒業式の後、新築したばかりの旭会館で謝恩会を迎えることができた。その席で先生が突然、「手塚君、君が社会に出て、どれくらい俗物になるか楽しみだよ。」と言われた。少々むつとした私が、「先生、俗物にならないためにはどうしたらよいのでしょうか。」と聞き返すと、先生は「そ

れは君、一日十五分でもいいから学術的な本を読むことだ。」と答えてくれた。先生のアドバイスを聞かなかつた私は、すっかり俗物になつてしまつたが。

大学を卒業した後、先生には様々な面でお世話になつた。まず、東大時代の大内ゼミOB会「たにし会」である。先生はこのOB会に、信州大学大内ゼミの卒業生を加えてくださった。大内山脈とも言うべきたにし会には、正に錚々たるメンバーがおいでになる。そうした方々と様々な形でネットワークを持たせていただいた。

たにし会では、先生の米寿をお祝いして、「大内ゼミナールたにし会の半世紀」を出版している。これは、各学年の代表者による歴代のゼミの様子を綴つたものである。信大図書館にも寄贈されているが、ゼミ生から見た大内ゼミという意味で、非常に興味深い内容となつている。たにし会以外でも様々なご縁をいただいた。特に、哲学者の内山節氏をご紹介いただき、多くの教えと、内山さんから派生する様々な人々との知己を得ることができている。内山さんによれば、先生は「うちのゼミに面白い学生がいる。是非、何かの機会に会つてみてくれ。」と言われたとのこと。私はこのことを最も光栄なことと思つている。

二〇〇五年、たにし会主催で行われた「米寿を祝う会」で、先生は高齢者協同組合の活動に触れられた。資本主義の矛盾がますます深くなる中で、これまでは違う働き方や社会のあり

方を模索する思想がその背景にあることも述べられた。多分先生の頭の中には、新しい労働や経済の理論が組み立てられていたのであろう。先生のご発言をまとめた「協同組合社会主義論」の中で先生は、「・・・協同労働というものは、もう一度本来の労働の喜びを取り戻すことであると思ひます。労働は、人と人との結びつきであり、人と人とお互いに助け合いながら、自分の労働が相手の役に立ち、相手の労働で自分が生活できる社会にすることなのです。・・・」と述べられている。

さて、先生のことを思い出せば際限なく、また、大きな心の支えを失つてしまつたことに今更ながら愕然とせざるを得ないが、大学時代、そして卒業後も学恩をいただいた私にとって、先生が残された大きな業績や人々との結びつきの中で、先生のお考えを下敷きにしながらかれからも地域社会や地域経済の望ましい姿を考えていきたい。最後に、私は、人の死を生命的な観点からのみ捉えることにいささかの疑問を感じている。

それは、人間の存在は関係性の中にあるからであり、先生が亡くなる前に考えておられた経済・労働理論が、人や社会との結びつきを重視しているように思えるからこそ、先生は、そうした社会を志向する多くの人々の心の中に、いつまでも存在し続けるのだと思う。



実践する人材

轟 寛逸

(1978年入学)

上野の国立西洋美術館で六月まで開かれていた「ルーブル美術館展」でジョルジュ・ド・ラ・トゥールの『大工ヨセフ』を見ることができた。モチーフは、幼少のイエス・キリストと父ヨセフ。わが子の聖性に打たれたヨセフが、大工仕事の手を止める瞬間を、神秘的なローソクの光とともに描いている。そこは、日常の仕事場である。

自分を迷いから解き放つ答えの多くは、現場にある。私が仕事でお付き合いをしたことのある世界最大の組織・人事系コンサルティンク・ファームの日本法人の社長をしていたS氏が、一昨年そのコンサルティンク・ファームを離れ、「実業」の世界に移つた。コンサルティンクとしてではなく、経営の実務に携わる道を選んだわけである。S氏は、乞われて移つた最初の会社を一年で黒字化した後、昨年からは、皆さんよくご存知のビデオレンタルT書店の運営会社のCOOを務めている。

S氏が「実業」の世界に移つた時期は、私が「実践」から答えを見出すことの重要性を再認識した時期と重なる。私は、長野県の行政に身を置く者であるが、二〇〇二年から三年間にわたつて行政改革に携わつた。その時に長野県はS氏のコンサルティンク・ファームの力を借りた。私はそのコンサルティンクの手法を最も間近で観ることの

できる立場にいたので、S氏から多くのことを学んだ。併せて、自分でも企業経営や組織、人事に関する本を数多く読んだ。だが、実際の成果につながつたかという点、話は別である。おそらくその当時の最先端の理論に沿つて行政改革が進められようとしていたが、他の都道府県の改革も多かれ少なかれそうであるように、意識の底から職員を動かし、行動を変えることはできなかつた。職員が得心して実践する「理論」は提示し得なかつた。

S氏のいたコンサルティンク・ファームが提案した行政改革の手法は、全職員の参加による行政改革の推進手法として優れたものであつたが、職員が主体的に取り組む「一人称の改革」は思つたようには進まなかつた。住民との関わりに根ざした自らの仕事の質の向上のため職員一人ひとりが行う、ささやかな実践の積み重ねこそが行政改革の効果を生むのであり、日常の仕事と別の体系で取り組まれる行政改革は、労多くして効果は小さい。

世は、百年に一度といわれる不況の只中にある。その不況に見ている限り、この苦境の先の明るい未来をどうイメージしていいのかわ方にくれる。しかし、私が今、現場で接している中小企業の経営者たちは、絶望に打ちひしがれた暗い顔はしてない。「過去最高の売上げであつたものが、昨年九月のリーマンショックを境に、一気に崖の底に突き落とされた」と言いつつ

も、「今は、リーマンショック前よりずっと忙しい」と語る。従前の取引先との安定的な受発注の関係をしがみついているのは、明日はない。中小製造業の経営者たちは、新しい受発注のパートナーを求め、長野県内にとどまらず全国行脚をし、自社をアピールし、可能性を広げようとしている。それを語る彼らの眼には、輝きがある。マクロで見ている限り見えない希望や元気が、現場にはたくさんある。

たまたま私の場合は、行政に携わる人間なので、行く先々の任地で、その土地が持つエネルギーや人々の元気を見つけ、それがその地域の経済活動へとつながり、人々のいきいきとした暮らしにつながるようなお手伝いをするのが仕事である。私は今、「役人」が名実ともに「フアシリテーター」地域の元氣発掘人」となることが、すなわち行政改革だと思っている。一人ひとりの職員の実践を通してしかそれは実現できない。民間企業にお勤めの方々も、ビジネスチャンスを見つめる洞察力と、それをビジネスとして構築する構想力、実行力が求められるのは同様だろう。

大学からは毎年多くの人材が社会に出る。信州大学は、今年創立六十周年を迎えた。経済学部は、既に昨年、創立三十周年の節目を通過した。去る六月六日、信州大学創立六十周年記念式典の日に、二〇〇九年度の経済学部同窓会総会が開催された。渡邊裕学部長は、ご挨拶の中で中央教育審議会の答申に盛り込まれた「社会人力のある学生を

送り出す」という大学の役割に言及された。仕事の間における社会人力に關していえば、実践を通じて価値創造するための基礎、すなわち社会や地域に秘められたパワーを見逃さない感受性と種を播き、育てる構想力、実行力を身につけた人材を育てる教育が大学には求められる。そのため、大学も学生もフィールドワークを通じ好奇心を持って地域と関わるのがますます重要になると思うし、大学には本質を見極める探求の姿勢を身に着ける真の学問の機会を学生に提供し続けることを期待したい。

変わってゆく
松本を見つめて

福島 和利
(1981年入学)

「なあ、星谷。俺達が入学した時の二次試験科目って、小論文ともう一科目なんだってっけ？」

寄稿依頼をいただいたのを機に、彼と久しぶりに直接話をする事ができた。「英語か数学じゃなかったか？忘れちゃったなあ」同期生の単位取得に大きく貢献した伝説のノートの主の声は相変わらずハイトーンであった。

私が本学部に入学したのは、昭和五十六年、経済学部発足後の第四期生、学籍番号6Kである。飯田高校三年の夏、国体最終選考会で運良く長野県代表選手に選ばれてしまった私は、幸いにも学級担任が軟式庭球班の

顧問で、現役合格にこだわらず（諦めてくれていた？）後押ししてくれたこともあり、十月の本国体まで部活動に専念できた。冬になり、やっと受験モードに入った私は、短期集中で間に合いそうな二次試験科目の少ない本学部を志望したのであるが、三十年近くも前のことは思い出すことができず、冒頭の「なんだったっけ？」になった訳である。

飯田高校軟式庭球班OBで全国大会に出場している先輩が、他学部ではあるが信州大学で当時活躍していることも受験の奮発材料になり、志望動機は甚だいい加減ではあったものの、体育会系の粘りでこれもまた運良く滑り込み合格させていただいた。大学入学時の説明会後、受講科目の選択より先に、体育会軟式庭球部への入部を決めた私であったが、教養部時代は講義も真面目に出席し、文武両道の模範生であったと勝手に自負している。

しかし、学部生になり、部活動で北信越以外にも関東各地や北海道まで遠征するようになると、講義の欠席回数も増え、学部の難しい講義には当然のごとくついていけなくなっていた。そこで頼りになったのが伝説の「星谷ノート」である。彼は難解な数学から始まり、学部の様々な講義の内容について、要点をまとめてくれていたため、欠席していても後で彼のノートを見せるとらえば概ね理解できた。また、試験直前には、彼の下宿に同期生が集まり、集中講習を受けることもしばしばあった。彼が講義に出席していれば

安心であることから、三年目の受講科目選択において彼の動向が注目されたことがあったと記憶している。

当時の私は長淵剛や松山千春といった硬派な音楽を聴いていたが、彼の部屋にはヴァンゲリスのシンセサイザーBGMが流れていて、影響を受けた私はイージーリスニングにも興味を持つようになった。今でも「炎のランナー」や「南極物語」を耳にすると、当時集結した同期生の顔が思い出される。

ゼミでは、小湊繁先生にご指導いただいた。「大学Ⅱ小湊ゼミⅡ命」のような先輩が数人いて、先輩の議論のレベルの高さの前で私は尻込みをしていた。おそらく同期生の大半は先輩と議論が噛みあわず、さぞかし空気の読めない？先輩と思われたのではないだろうか。また、無分別な同期生が多く、小湊先生の悩みの種になったと思われるが、先生は温かく見守って旅立たせてくれた。今年の六月、松本市の地域振興の中枢を担う取引先の方から、その方が本学部の社会人大学院で小湊先生から各国の金融政策などの指導を受けた頃の話の話を聞くことが出来た。

「あの小湊先生の門下生ですか、羨ましいですね」と言われたことが恥ずかしくもあり、誇らしきももあった。先生の懐の深さに改めて感動し、我々の世代に求められるリーダーシップについて考えさせられたひとときであった。詳細については、次回的小湊ゼミOB会にて、博多や和歌山など全国各地から集まる

悪童門下生の前で披露することとしたい。先生は現在、松本市内の高校の評議員をされていると伺っている。今の教育の在り方などについて先生からお聞きできると思うと、OB会の楽しみがまたひとつ増えて待ち遠しい。

私は、七年前に松本市内に居を構えた。「常念岳や燕岳などの眺めが好きだから」が表向きの理由であるが、所属している軟式庭球実業団チームの練習コートが近いからというのが本音である。今年のチームには現役の信大生も加わり、親子ほど？の年齢差を越えて楽しませてもらっている。学生当時、全日本学生選手権で試合をした水汲のコートは、松本文化会館に変わり、サイトウ・キネン・フェスティバル松本ほか各種イベントを開催し山岳都市松本の名を広めていく。かつてアルバイトをしていた中華料理屋やレストランは居酒屋やCLUBに変わってしまったが、レコード・CDの「ほんやらどお」や古本屋の「青翰堂書店」はあの頃のまま営業を続けている。仕事柄地域振興や町並みについて考える機会をいただいているので、お取引様を支援しながら意見申をしていく所存である。

先日、業務上必要となる資格試験申込のため、本学部の卒業証書をコピーした。私の番号は「経624号」であるが、今年職場に入社してきた本学部の後輩に聞いたら6300番台であるとのこと。本学部創立後三十年の重みを感じるとともに、同窓会のすばらしさを後輩に伝え

る機会となった。
最後に、これまで支えてくださった小湊先生をはじめ、諸先生方、先輩や同窓生に厚く御礼申し上げるとともに、寄稿の機会を与えていただいた事務局の方に感謝し、近況報告とさせていただきます。

大学時代にタイムスリップ

小林 千晶
(旧姓 金井)
(1990年入学)

先日、職場の後輩と松本で飲む機会があった。その際に、卒業してから十五年振りに、バイト先の飲み屋さんを訪ねてみた。もしかしたら、閉店しているかもしれない……と思いつつも、風景が少し変わった松本の街並みを、時の流れを感じつつ昔の記憶をたどりながら女二人で暗闇を進んだ。遠くに看板の明かりを見つけた時はうれしかった。どこかのキャッチコピーではないが、「開いてよかった！」である。

扉を開けると、十五年前と変わらないマスターの笑顔が私達を迎えてくれた。とても懐かしかった。
このバイト先は、ゲレンデスキーの先輩が紹介してくれたところであり、週に二回原付で通った。私が、常連さんになりたいたいNo.1のお店である。当時の信大生が行くには少しおしゃれな、いわゆるシヨット(カクテル)バーである。「ローマの休日」を初めて見たのもこのお店

であり、ジンの味を覚えたのもこのお店である。
お店の雰囲気、メニューは十五年前にタイムスリップしたかのように、ほとんど昔のままだったが、マスターの奥さんのお腹にいた子供が中学生となり、吹奏楽に打ち込んでいること、長野冬季オリンピック以降お客さんが激減したこと、当時の常連さんが病気で他界したこと等十五年の時が流れていることを実感した。(この常連さんは塾の先生で、話がいつも面白かった。このバイトを紹介してくれた先輩には「一緒に映画を観に行こう！」と誘っていたが、私にはもらいものの映画のチケットを一枚くれる正直な人だったので、私は映画館に一人で行くという初体験をすることとなる。忘れもしない「ピーターパンの日本語吹き替え版」で、親子だらけの中に落ち着かない大学生がポツンと一人……一つ大人になつた気がした。)

が、当時は必死であった。
また、マスターには気を遣わせてしまった。マスター曰く「バイトの中で一番私が話しやすく、お客さんからも人気があった。」とお世辞も言ってもらった。後輩の前で顔が立った。マスターはたまに毒舌だが、脱サラする前の営業マンの片鱗を見せ、そのトークに魅了されたお客さんが吸い寄せられるように通っているのではないかと、当時も感じていた。
だが、不況の波はこのお店にも押し寄せていた。花の金曜日であるにも関わらず、この日のお客さんは、私達二人とマスターの同級生一人の計三人であった。私がバイトをしていた頃には考えられない光景だ。十五年振りに来ておいて非常に自分勝手な言い分ではあるが、次回松本を訪れた時もマスターの笑顔が見られることを切に願う。大学時代にタイムスリップ出来る場所を残しておきたい。と強く思った。

「知」を「血」に
換えて「地」に還す
水野 正人
(1999年入学)

今から十年前、一九九九年四月に、私は信州大学経済学部経済学科へ入学しました。ちょうどその年に、人文学部・経済学部の新棟が竣工しましたので、新棟での快適な授業がとても楽しみだったと今でも記憶しております。二年次から井上ゼミに所属し、「ジェンダー論」や「家族論」を学びました。三年次の二月頃から就職活動を始め、四年次の五月中旬に、東京の酒類・食品卸の会社からの内定をいただきました。学業の方は、優秀な同期に助けられながらも、なんとか卒業できましたが、「アルバイト」「バスケット」「スノーボード」のいずれかをしています。

ような不真面目な学生でした。しかし社会との関わりを多く持つことができ、良い経験が積めた四年間でした。
東京でのサラリーマン生活は、恵まれたものでありました。吉祥寺の独身寮は超格安で朝夕食事付き、勤務地の八重洲には中央線で三〇分で通勤することができました。寮の先輩方には公私ともによく面倒を見ていただき、今でも東京に仕事で行った際は、食事をご一緒させていただいたり、最近も寮で一緒だった先輩から結婚式に呼んでいただいたりと、深いお付き合いをさせていただいておられます。職場では半年間の研修後、いきなり本社配属となり、二十歳そこそこの若輩者にとっては全てが勉強の毎日でした。しかし同時に、千人以上の社員の中で「自分は本当に会社にとって必要人間となるのだろうか」と不安に駆られる時期でもありました。そんな社会人三年目のある日、スポーツビジネスへ携わるきっかけがありました。長野県でプロバスケットボールリーグ「bjリーグ」への参入を目指している団体があることをインターネット上で知ったのです。思い立ったら吉日。すぐにその代表に連絡をしました。翌年の四月に私は東京の会社を退職し、五月のGW明けには、新潟にその身を移していました。
「アルビレックス」というフリースを聞いたことがある方は多いと思いますが、私は五月より『新潟アルビレックスBB』というプロバスケットチームの運営会社へ転職しました。bjリー

グへ長野県からチームを参入させるために、ここでも勉強の日々が始まりました。スポーツ球団の運営で、主な収入源は『スポンサー収入』と『観戦チケット収入』の二つです。この両者があって初めてチームを組織し、勝利という目標に向かって戦うことができるのです。観戦チケットには、観戦できる権利(座席)という価値しかありません。興味のない方にとつてはただの紙切れです。また、チケット料金は球団によつても異なり、座席も会場によつても異なる構成なので、一口に「チケット」と言つても、一万円のチケットと千円のチケットでは、価値のつけ方が全く変わります。お客様はどこに価値を見出していただくかということを試行錯誤しながら、営業に奔走してました。一方、『スポンサー収入』の見返りとして提供される価値には、「広告効果」と「地域貢献」の二種類があります。いずれの面にも言えることは、その媒体を利用する人々の質と数を重視するという事です。スポーツ球団の運営というのは、営利目的であるのは当然ですが、他のビジネスよりも公共性が強く、時間や空間を価値として提供し、非日常的な一体感や高揚感を体感できることに、存在意義があると私は学びました。

長野県に戻つてきてからは、長野県のプロバスケットチーム誕生のために、いろんな面から活動が続けています。現在は松本市に活動拠点を移し、屋外で三人対三人でおこなうバスケットボール、「スリーオンスリーバ

スケ」の大会を主催する『GBC』という団体に属しており、約一年後に団体をNPO法人化するという大役を仰せつかつております。

現在、長野県にはトップリーグに所属するプロスポーツチームはありません。長野県にプロスポーツチームがあることで何が起るのか、どんな影響があるのか、まだ誰も経験したことがないので、私はそれを学問として身にしていくことはできませんでしたが、創造しながら体感する場を、これから社会に羽ばたいていく若い人達に提供したいと考えています。

「隣の芝生は青く見える」と言いますが、人間は欲深い生き物です。欲求を満たしたかと思えば「もっともっと」と欲する生き物です。かたや、無くなつてからその有り難さに気づくということを経験している方も多々と思えます。地元長野県を離れてみて、その良さに気づいた私もその一人です。当たり前に思いつく存在になることは、例えば地元スポーツチームを応援するような、人々の日常と非日常を行ったり来たりすることと同義であるとは考えます。

ここ数年、サッカーでは松本山雅やAC長野パルセイロが、野球ではBCリーグの信濃グラッセローズが地元スポーツチームとして積極的に関与に根ざした活動を続けております。また長野五輪以降、ウインタースポーツも大会誘致や選手育成に力を注ぎ続けています。その中で、バスケットボールという

ツールも長野県の方々に必要とされ、期待されるような存在になることができるよう、精進してまいります。

文学部卒業生からのたより

思誠寮懐古

文学部自然科学科1963年卒業

小林 實

半世紀を経て思い起こして、なお思誠寮は懐かしい。昭和三十四年度合格通知書に思誠寮の入寮許可書が同封されていたかは定かではないが、入寮することが出来た。

信州松本あたりでは、四月中旬ごろ入学時期に二、三日寒い日が続くことがある、入寮したのはそんな日のことだった。

寮委員の受け入れも申し分無く、さすが大学の自治寮と感じ入った。もともと寮生活に一種憧れを持ったのですべて好ましく思えたかも知れない。

南寮の隅の部屋(だったと思うが)に落ち着くが、火の気は無く寒かった。同室者は未だ帰省から戻っていない様子。

南寮一階の廊下のあちこちの入り口に、下山間も無いのか山の用具があり雑然としていた。これも後から分かったことであるが、南寮一階には何人かの山岳部員が陣取っていたのです。二十号室の住人は八年間、そこを根城にして山岳部のことや寮

経済学部同窓会の新参者であります。これからは未永くお付き合いたいだければ幸いです。

の面倒を見てくれて、まさに「名主」的存在の御仁やら、いかなる故か卒業を急がない面々の割合が大きく独特の雰囲気をももっていた。

窓の正面はグラウンド、高ボッチ、東に王ヶ鼻、西には壮大な日本アルプスの峰峰とこれ以上は望むべくも無い絶景の中にある。

いよいよ寮生活が始まる興奮は大きかった。家を離れた開放感と使命感を感じながらわくわくしたのもだった。委員会の主催する行事は多彩であったが新寮生歓迎コンパは圧巻であった。

南は沖繩(当時は本島の留学生)から北は北海道と幅広い地域から集まり、いろいろなお国訛りの混じった可笑しい自己紹介があり、または存在しないような国からの留学生と法螺を言い、おまけにその国の国歌だと言つて意味不明な歌まで披露して拍手喝さいを得ていた御仁はただ雪山で真っ黒に日焼けしただけの一見黒人風だけであつたりして、旧寮生は雄弁多才で飽きる間もなかった。

コンパ最終にすべてのあかりを落とした中で歌う「春寂寥」には感極まるものがあり、これで寮生になれたと思つた瞬間であつたし、寮歌の素晴らしさを

実感したときでした。

寮歌の練習も恒例の重要行事の一つである。殆ど口伝えて覚えてように記憶している。旧制松高時代、毎年の記念祭に寮歌が選定されてきたと聞く。寮歌も時代を反映して明るいものも暗い印象のものも、数多くありそれぞれ味わい深い。当時の高等学校生の意思の確かさ見識の高さを改めて感じた。

寮の生活が始まり、陽気が良くなると同時に講義が始まり、友人の輪が出来、毎日が新鮮な気分だった。

どの部屋もただ食う寝る処だけではなかつた。勿論、整理整頓され清潔な部屋もあるがそうで無いのも多かつた。時間的観念は希薄で何時までも話し込み、時に酒を酌み交わし、腹が減つたら(何時も空腹)うどんを作るような毎日が続き、寮生皆の顔も覚え住人の一人として完全に溶け込んだのである。

寮独特の非日常的な行動にもすっかり慣れたと言うより、積極的に日常化して行つたのです。ストーム、簀巻ぎ、寮雨、ダベリング、コンパ等みな寮の蛮行ではあるが若く血気盛んな年代の集まりとすれば当然な成り行きであると思いつつも楽しめ懐かしい。「どくとるマンボ青春期」を読むに報復絶倒の場面に

出くわす時、きつと同じような寮生がいたのです。

六十年安保闘争の真っ只中にあり、街頭デモ参加やら、国会突入支援部隊の壮行会やら寮内も騒然とした時もある。

寮委員長時代に食事費の値上げ問題、寮生の山岳部員の遭難

発生は痛恨事があった。百瀬のおっちゃんの献身的努力にも拘わらず値上げせざるを得ず確か月額にして三百円以下だったと思うがそれは約一割に相当した。寮ではよく少々新鮮さを欠く魚が出ていたためか、以後魚に当たったためしは無い。

寮の文化施設拡充を計る目的をもって委員会(?)を設立して、卒業生はじめ関係者への寄付を募ったところ可也りの応募があった。

寮にはテレビが据えられ、風呂場からは最新式の洗濯機の唸り声が聞こえた。そのほか何かあったと思うが、記憶に無い。先輩の皆さんには心から感謝した。

こんな経験から、会費は勿論のこと小額の献金が必要な時はすることにしている。

同窓会や寮歌祭の時少人数ではあるが緑色のブレザーを纏った一群をご覧になった方もいらっしゃると思います、これについて少々触れてみたいと思います。

これを「こまきさ会」と称し、一度はヒマラヤ杉の下で共に過ごした連中であれば参加出来る親睦会であり、設立以来数十年の伝統を誇っているが、このところ鬼籍に招かれる人が増えて会員の減少が気になっています。年一〜二の会合を松本か伊那のどちらかで行い、旧交を温め、各々山へ、ゴルフ、散策、会食へと好みを選び楽しみ寮歌を歌い、昔を偲ぶ会です。

松本市、ヒマラヤ杉、あがたの森、思誠寮跡に佇めば、自ずと寮歌が浮かび来る。われらの

みずすまし

文学部員数科1963年卒業

清水 邦男

青春もやはりここにあったのだ。

かつての松本から上高地に至る国道158号線の奈川渡を知る人は少ないと思う。稲核(いなこぎ)に始まる梓川水系のダム建設以前は、上高地から流れ下る梓川と、木祖敷原方面からの奈川が合流する地点に奈川渡があった。松本方面から上高地に向かい奈川を渡った橋のたもとに奈川渡館と云う小さな宿屋があったが、今は奈川渡ダム(梓湖)の底にひっそりと沈んでいる。

時は今から約五十年前、昭和三十五年五月のことである。当時京都大学の大学院生であった星合誠さん(文理物理学科一回卒)が物理学教室に來られ、梓川の水温等の観測を含めたアルバイトの話があった。ダム建設が始まる前の時期で、梓川水系に関する熱収支の基礎データ収集とのことで、物理学科の二年生から四年生合わせて八名が参加した。

観測地点は、奈川の黒川渡、梓川の稲核、奈川渡の三か所での定点観測で、本部は奈川渡館の二階に設定された。

観測内容は、各地点での水温、アスマン乾湿計による水面上五センチでの湿度と、川の流速測定であった。特にアスマン通風乾湿計は初めて見る器具であり、ゼンマイ式で風を湿球と乾

球に送り湿度を測定する仕組みに感心したりした。流速については特に計器を使用するものは無く、白い浮きを決められた地点から流し、観測点までの時間を計る原始的な方法で行われた記憶がある。

私は、奈川渡館の本部に詰め各地点とのハンドトーカーによる連絡と観測に当たった。

観測は午後七時から翌朝七時まで一時間毎に行われた。作業そのものは十五分程度で完了する内容であったが、雪解け水を湛えた川辺の夜は結構寒く、水温測定の手が凍えた。

リーダーの星合先輩は大変柔和な方で、眼鏡をかけた姿が当時の喜劇俳優「エンタツ」に変よく似ていたので仲間内ではエンタツと呼ばれて親しまれた。エンタツさんは夜十時になると必ずNHKのラジオ第二放送の気象通報を聴き、記録紙に記入しあつと云う間にさらさらと見事な天気図に仕上げられた。

当日は、梅雨にはまだ余裕が有る時期ではあったが、天気図には低気圧の通過が予測された。エンタツさんはかなりの雨になることを予想されていた。案の定、夜半前からぼつぼつと雨が降り始め、深夜には豪雨となった。

それまで何事もなく静かだった本部に各地点からの報告が殺到し慌ただしくなった。

黒川渡、増水によりテント及び観測機材の流失のおそれあり同じく稲核、急な増水により観測の継続困難。即座に星合さん安全な場所への避難と観測体制の撤収を指示された。当時の梓

川、奈川はなかなかの暴れ川であり、度々氾濫を繰り返していた。結果、一つ間違えば惨事となる危険をはらんでいたが適切な判断により事なきを得た。

一夜明け、翌朝各地点からの仲間が全員奈川館に集合し朝ご飯を共にした。宿には、館主とおぼしき親父さんと、若さゆえ皆が娘さんと期待した女性が一人いて、給仕をしていた。まるで台風一過のような天気、快晴の陽ざしに生える新緑を映し、何事もなかったように梓川はサラサラといつもの佇まいであった。食事後誰かが川の様子を見に川辺に降りて行った。そして、お茶を飲んでくつろぐ皆に報告。「梓川よりも奈川の方に水がきれいに澄んでいるよ」。それを聞いた、奈川渡班の増田さん。持前のまじめな顔で、「そういえば、黒川渡には水すましがいっぱいいたじ」と言ったので、皆腹を抱えての大笑いになった。

今は、ダムの底深く沈む、奈川渡館での出来事ではあるが、奈川渡ダムの道を通る度に、青春のひと時を思い出している。

追記 観測の指揮に当たられた、星合誠さん、先輩 岡田光生さん(文理九回)、増田博さん(文理十一回)はすでに鬼籍に入られておられます。ここに記録を記すに当たり、あらためてご冥福をお祈り致します。



編集後記

学生のいわゆるシユウカツ(就職活動)が年々早まり、最近の大学四年生は忙しくて大学にいない。大学教育は、実質三年である。

いやそれどころではない。シユウカツは三年生の秋以降始まる。就職セミナーや模擬面接などが、このころから始まる。年が明けて二三月にはもう会社訪問である。大手企業など早いところでは四月には内々定(実質内定)をだす。しかし、ここで決まる学生は幸運であり、決まらない学生は延々とシユウカツを続けなければならぬ。消耗しヘトヘトになる。

じっくり勉強し、将来伸びるためのこやしを沢山まかなければならぬ時期に、このようなことではないのか。卒業生の皆さんのころはどうだったのか。一九九六年の就職協定廃止以前においては、会社訪問は七月一日以降、内定は一〇月一日解禁ということに一応なっていた。そのため今日ほど酷い状況ではなかったかもしれない。もっともこの就職協定さえ守らない企業が続出し、その廃止は形骸化が理由であったという(『日経』二〇〇九年三月一三日付)。

いまやゼミは二年生と三年生で構成され、熟成した四年生の指導が受けられない。四年生も卒業論文の作成など、もっとも総合力のつく勉強ができず、熟成しない。グローバル化や知識社会化が進むなか、このままでいいのか。文部科学省は、ようやく就職協定復活へ動き始めたようであるが、企業は難色を示しているという。

皆様よい夏を！ (事務局)